

## シンポジウム「原三溪の漢詩の世界」

横浜美術館で開催中の「原三溪の美術」展における原三溪市民研究会との連携事業として、シンポジウム「原三溪の漢詩の世界」が開催されました。基調講演では鄧捷先生（関東学院大学教授）から、原三溪が作った漢詩8首について解説がありました。続くフリートークでは、原三溪市民研究会・漢詩部会のメンバー7名と鄧先生が登壇し、8年かけて読み解いてきた漢詩の難しさや面白さを語りました。藤嶋会員による報告と鄧先生からの講評を紹介します。



鄧先生の基調講演

原三溪の漢詩の解説を一般に紹介することは今回が初めてであった。登壇する会員諸氏は本番直前まで緊張とリラックスが交錯した宙づりの状態で、時間だけが逼って来るのを感じていた。

基調講演での鄧先生の主張は、三溪が原合名会社を経営する実業家でありながら、一方で質の高い漢詩を作ることが出来る教養人であることを、三溪の少年時代にまでさかのぼって解き明かそうとする。その例として15歳のときに作った七言律詩で『三溪集』には収録されていない「名古屋雑詩」を取り上げる。この漢詩から15歳の少年がいかに高いレベルの漢学の素養を備えていたかを紹介する。次いで三溪の漢詩を「故郷」、「横浜」、「関東大震災」、「別荘生活」、「己の生き方を見つめる」などのテーマに沿って読み解きながら、そこから何が読みとれるのかを考える。三溪の漢詩には、箱根や伊豆の別荘で白雲を相手に隠者の生活に憧れるものが多く、それは「出世」（世から隠遁すること）の思想と考えることができるが、決して俗世間に背を向けるわけではない。常に実業の人であり、愛市の人で近代日本の実業家として、「入世」（世に関与すること）の考え方を強く持っていた人であると結論づける。

第2部は会員によるフリートークに移る。廣島会長がパネリストを指名して進行を促した。まずは福田会員が、伊豆長岡の別荘「南風村荘」で作られた漢詩を取り上げる。当時は桃源郷ともいえるほどの牧歌的な田園地帯で、三溪はここで「名山」や「大佛山」、あるいは「南風」を象徴的に扱う漢詩を作る。それが果たして富士山なのか、それとも他の山を指すのか、解き明かした時の苦労話を披露する。次の片岩会員は、復興小唄「濱自慢」を取り上げる。漢詩に加えて、趣味として日本画を楽しみながら三溪の心境に近づきたいと思っている。次いで小林会員は、漢詩の読み解きは謎解きに似ている、そのプロセスは決して「四苦八苦」ではなくむしろ「四楽八楽」であると、「遊金澤」を題材に切り込む。4番目の速水会員による「藤澤途上呈石原明府」は、「明府」や「玉芙蓉」、「七郡」などの語句をひとつひとつ調べることで背景を解き明かす面白さを披露する。次の大川会員が取り上げる「臨川寺」は、禅僧夢窓国師が入定した寺で、その境内に三溪は「隣花庵」という庵を結んでいる。大川会員はいつも鄧先生と三溪に対する愛を巡って議論を交わすが、何度も書き直すうちに全く別の世界が見えて来て納得するのだという。藤嶋会員は、8年をかけた漢詩

の読み解きは三溪の自叙伝を読んでいるようで、また年譜の行間を読むことでもあったという。漢詩には三溪の人生が刻まれており、悩みを見せない三溪も晩年の「偶感」では悩んでいる。しかし読む人によって悩みの内容が異なるのがこの詩の特徴である。

最後に漢詩のもう一つの楽しみ方である人間の生の声で味わう趣向を設けた。「下濃州舟中作」の詩を、鄧先生が中国語の朗読で、続いて廣島会長が訓読に節をつけた詩吟で披露した。（藤嶋）



速水会員



小林会員



片岩会員



福田会員



廣島会員（司会）



藤嶋会員



大川会員



鄧先生

『三溪集』の解説は 2011 年秋学期の「テキストを読む」という授業から出発して、先日の横浜美術館で開催されたシンポジウム「原三溪の漢詩の世界」まで 8 年間になりました。その間、解説の成果を公にしたのは、2015 年 2 月 15 日の関東学院大学と横浜ウォーカーのコラボ企画「横浜学」第 11 回「横浜と原三溪」（関内メディアセンター）、2019 年 2 月 23 日の関東学院大学「鎌倉・金沢フォーラム」の講演「漢詩から読み解く原三溪」（金沢文庫キャンパス）、また論文の形で学会誌に掲載した「原三溪の漢詩」（日本聞一多学会誌『神話と詩』第 17 号、2019.3）です。

私と共に解説に参加してきた原三溪市民研究会漢詩部会の皆さんはこの 8 年間、漢詩の一字一句に悩まされ、各地の三溪の足跡を追い、三溪の一生に寄り添う「日記」を読むような「手触り」でその生き方を学んできたと思います。『三溪集』は明治末期から昭和初期まで書かれたものを集めたものです。約 100 年の時間を超えて作者三溪の温もりに触れたことはほかのどこにも得難く感慨深いものです。これは何ととっても原典というものの力です。この原典が学問の域を超えて私という外国の「客」（これも三溪が自らを位置づける際のキーワード）にもたらしたものは、横浜の歴史への理解、この土地及び人々への愛着です。（鄧捷）